

---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 127

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



---

## 目次

- 2521. 流れと最下層から
- 2522. 幸福感の中で
- 2523. ある日曜日の朝に
- 2524. 音の息吹
- 2525. 日常の背後に遍満する輝き
- 2526. 羽のような日曜日
- 2527. 経験と叡智
- 2528. 感動の原形質と新たな真実
- 2529. 国際ジャン・ピアジェ学会に向けて
- 2530. 初夏の雰囲気漂うフローニンゲン
- 2531. 曲が持つ自己組織化力
- 2532. 豚の腹を叩く音
- 2533. 今日一日の活動内容
- 2534. 生きた絵画の恩恵
- 2535. 生きる意志・自由・創造の流れ
- 2536. 表現技術の涵養に向けて
- 2537. 研究ミーティングに向けて
- 2538. 絶え間ない揺らぎの中で
- 2539. 歩くことの意義
- 2540. 二羽のカモより

—私は流れる。ゆえに私である—リルケ

時刻は夕方の七時半を迎えようとしている。正午のような世界が今日の前に広がっている。一切の雲がなく、晴れ渡る夕方の空。時折この街を吹き抜ける風がどこか心地よい。

先ほど夕食を摂りながら、はたと食事の手を止めた。自分は一体どこに向かっているのだろうか。この内側に流れる確かな流れ。それは確信に満ちたものなのだが、流れの先は全くもって不確かだ。そもそも流れには行き先があるのだろうか。あるとすればそれはどこへ向かっていくのだろうか。

仮に自分の人生そのものが巨大な一つの流れであり、流れしかそこに存在しないのであれば、流れに向かう先などあるのだろうか。「流れるからには向かう先がある」というのは本当だろうか？ 全てが、本当に全てが流れに満たされており、流れしか存在しないのであれば、そこには向かう先などないように思えてくる。「私は流れる。ゆえに私である」というリルケの言葉が深く沁み入ってくる。

私は絶えず流れる。だがそこに向かう先などあるのかわからない。「向かう」というのはそこに未来が内包されているがゆえにおかしいのだ。どこにも向かわない流れ。絶えず現在である流れの一地点。それを私は知覚している。そしてそれが自分だ。

今日は一体何をしていたのだろうか？と毎日思う。毎日だ。絶えず読み、絶えず書き、絶えず作る生活。それをもっと徹底して行いたい。

ここ数日、就寝前に脳裏をよぎるのは、「創造活動だけに従事する生活を数年以内に必ず始める」という強い意志である。日記、曲、絵。それらだけ。それらだけを絶えず創造し続ける毎日。そうした毎日を本当に送りたい。

そうした日々を送るためには随分と多くのことを捧げなくてはならないことを知っている。どこかで本当に自分の人生を生きなければならないのだ。とにかく創造することだけに専念するような日々を必ず実現させようと思う。それは数年後からであっていい。だが必ずそうした日々を送ろうと固く誓う。

---

今日は昼食後に、ドビュッシーに範を求めて曲を作った。楽譜の表面的な印象とは異なり、ドビュッシーの曲を参考にするのは相当に難しかった。ある曲に範を求めるといのは、至難の技であり、ある曲を参考にするためにはそもそも技術が求められることに気づいてしまった。また、ある曲を参考にしようとした瞬間に、その曲が本来持っているアイデア的な何かが崩壊する。

いくら似たように部分を積み重ねていっても作曲者が元来生み出していた全体に至ることはないという不思議さ。そこに作曲者の固有性と曲そのものが持つ固有性が宿る。それはまさに曲の生命なのだということにはたと気づかされる。過去の偉大な作曲家の曲に範を求めるといのは想定以上に難しい。

いつも駄作の極みしか生まれない。たとえそうだとし、駄作から始めなければならない。いかなる発達現象にも潜む階層的複雑性を忘れてはならない。自分は底辺から始めなければならない。

「何をやってもいつもそうだったではないか」という心の声が聞こえる。本当にその通りだ。最下層から歩くこと。しかも長く継続的にその地を歩むこと。これをしなければ何かが深まっていくことなどありはしないのだ。

小鳥が街路樹の高い場所から鳴き声を発している。あの鳥を見よう。あの鳥が空を飛ぶ前の姿を見よう。地面から出発したはずだ。地面から始めること。地中から始めること。それを忘れてはならない。

フローニンゲン:2018/5/5(土) 19:42

## 2522. 幸福感の中で

今朝はここ数日より早く五時半に起床し、六時前から一日の活動を開始した。今日も充実した日になるという確かな確信が自分の内側に溢れている。

今日は日曜日ということもあってか、辺りはいつも以上に静かだ。起床した時刻はちょうど朝日が昇り始めている頃だった。六時に迫った今、手前の空は淡い青色を広げ、遠くの空は淡いピンク色を広げている。ちょうど今、小鳥たちが鳴き声を上げ始めた。

---

一切の風がなく、世界が静止しているかのようなものである。この静けさゆえに、小鳥たちの鳴き声はなお一層際立った響きを持つ。起床した直後から、「今日も充実した一日になる」という確かな確信が持てたこと。これはとても幸せなことだ。

日々が迷いと幸福の中で過ぎていく。迷いを持てるということは、この世界の中で生きていることの証かもしれない。今抱えている諸々の迷いは、自らの存在を日々の幸福さの中で深めていくことによって少しずつ消えていくだろう。今日の前に見える一切雲のない空のように、現在抱えている迷いもきっと晴れ渡ってくるに違いない。

迷いというものを抱えられるほどに自己に成熟の余地があるということ。それを見なければならぬ。自己を縛る諸々の事柄から解放され、真に自分の人生を歩み、自らの創造活動だけに邁進すること。その実現に向けて障害となるものが目の前に立ちはだかるのは当然のことだ。それを乗り越えていくためには、今の自分を乗り越えていく必要がある。

現在の課題を克服していくためには、現在の自己を克服していく必要があるのだ。それが発達の原理である。課題を克服するのではなく、自己を克服すること。迷いを乗り越えるのではなく、自己を乗り越えていくこと。そうした発想の持つ妥当性が明るみになってくる。

芸術家でもない人間が芸術の中で生きれることと芸術的に生きれるということ。それらを自らの人生を通じて確かめる。人は自らの内に固有の芸術性を持つ。であれば、自分にもそうした芸術性があるはずだ。それを開くための精進をし、それを開かせながら日々を送る生活。

人間の発達性と芸術性というのは瓜二つなのではないだろうか。どちらも内在的に人に宿り、どちらも内側から花開いていく。

輝く朝日が赤レンガの家の屋根を照らし始めた。屋根の一角が黄色く照らされている。朝日を出迎えるかのように、微風がフローニンゲンの街を駆け抜けた。鳥たちも思い思いに空を自由に舞っている。

小さな自我から自己を解き放つこと。その実現に向けて、今日もまた自分にできることを小さく積み重ねていこうと思う。フローニンゲン:2018/5/6(日)06:15

---

## 2523. ある日曜日の朝に

今朝方、とても感動的な夢を見ていたことを思い出す。起床直後には、その感動の余韻がとりわけ強く残っていた。今も確かに感動の粒子が自己の内側に残っているのがわかるが、その夢がどのような内容であったかは忘れてしまっている。一方で、その夢の続きであれば記憶に新しい。

夢の中で私は、小綺麗なホテルのダイニングルームにいた。ちょうど朝食を摂る時間であり、私は幾つかの食べ物を取りに席を立った。どうやらここはフランスであることがわかった。というのも、フランスのリヨンの街にあるサッカーチームの選手たちがそこにいたからである。

彼らがフランス国内の他の場所で試合を行うためにここにいるのか、それともこの場所はリヨンであるかのどちらかと判断した。偶然にも、私の友人が二人ほどその中にいた。私は、目の前に並べられたパンを眺めながら、彼らにクロワッサンを届けようと思った。二人に挨拶をし、クロワッサンを渡したところ、彼らはとても喜んでいた。

どうやらこれから試合があるらしく、試合前の最後の食事をここで摂っているとのことだ。今日の試合はリヨンのホームグラウンドで行われるらしく、私は幸運にも二人に試合に招待をしてもらった。朝食を摂り終えるか否かのところで、辺りが突然グラウンドになった。すでにホームのリヨンサポーターがゴール裏に陣取り、大きなチームフラッグを振っている。

試合が始まる前から、すごい熱気である。同時に、その熱気にはどこか品があったのは面白い。私は、監督や選手が座るベンチで試合を観戦する機会に恵まれた。試合が始まるまで、ピッチ沿いの芝の上を歩きながら、スタジアム全体の雰囲気を感じていた。試合が始まるか否かのところで夢の場面が変わった。

今朝方の夢に関して記憶に残っているのはそれぐらいだ。その前に見た夢がとても感動的だったのだが、その夢について何も思い出すことができない。感動的だったことだけが明白な夢。対象の形は見えないのだが、対象がもたらす感動だけがそこにあるというのはとても不思議だ。

人はもしかすると、対象が明確に見えなくても、何らかの固有の感情を持ちうるのかもしれない。見えないものを知覚し、そこからある感情を引き出しうるという力には驚かされる。それをあえて神秘的

---

と表現しなかったのは、きっとここにも何かしらのメカニズムが存在しているからだ。日々、神秘的だと思って疑わない事柄を脱神秘化することに向かって尽力し、それでも神秘として残り続けるものを発見しようとする自分に気づく。今日も真の神秘に向かっていく日になるだろう。

赤レンガの家々に照らされる朝日の存在感が増してきた。目の前に立ち並ぶ赤レンガの大半が朝日に照らされるようになった。また新たな一日が静かに始まりを告げている。今日もまた、完全に新しく、完全に充実した日であることを予感させてくれる、そんな日曜日の朝だ。フローニンゲン:2018/5/6(日)06:37

#### 2524. 音の息吹

今日は早朝に、過去の日記を編集したいと思う。一昨日と昨日に引き続き、今日も時間のゆとりがあるため、これまでの日記を20本ほど編集したいと思う。おそらく20本の日記の編集は午前中の真ん中あたりで完了するだろう。そこからは、現在協働執筆中の書籍のレビューを行う。

昨夜も少しばかりレビューを進め、今日の午前中に全体のレビューを完成させることができればと思う。昼食後に作曲実践を挟み、午後からは、ある協働プロジェクトのレポートを作成する。レポートの作成に目処が立つ頃には夕方か夕食時になっているだろう。夜には、協働者の方へのメールを一通書き、今週の水曜日に行われる研究ミーティングに向けて、二人の博士に論文のドラフトを送る。

ちょうど明日、主たる研究アドバイザーであるミハエル・ツショル教授とミーティングがあり、その内容を受けて論文を修正していくだろうが、とりあえず現段階のものを水曜日のミーティングの当事者である二人に送る。今日の計画としてはそのようなところだろうか。

日々の自分の取り組みは、本当に平日も休日も関係なく、一定のリズムを持っていることがわかる。自らのなすべきことが、途絶えることのない一つの大きな流れの中に組み込まれているという確かな感覚。いや、日々の取り組みが流れそのものになっている。流れの中に組み込まれるというよりもむしろ、それは流れに他ならないのだ。

---

流れとして日々の取り組みに従事できているということ。まさにそれが毎日の充実感と幸福感を生み出している。

昨日、短い曲を三曲ほど作った。作曲の進展に関しては高望みをしてはならない。焦らずゆっくりとその歩を進めていく。自由に曲を生み出すことのできる境地が遥か彼方にあることがわかっていても、それは確かにあるのであって、そこにゆっくりと向かっていけばいいのだ。昨日作った曲のうち、一曲は和的なものだった。

現在使っている作曲ソフトを確認すると、日本の伝統的な楽器がいくつかあった。その中でも私は、尺八を選んだ。これまではピアノ曲を作ることが多かったが、尺八に惹かれるものがあった。あの楽器は鍵盤楽器でも打楽器でもない。息を吹き込むことによって音を出す楽器だ。

「息を吹きこむ」という行為に私はどこか惹かれるものを感じた。息に魂が宿るということをどこかで聞いたことがある。息を吹き込むというのは魂を吹き込むことに等しい。そんな考えが脳裏をよぎり、尺八の音色で曲を一つ作った。

その曲にはどこか和的なものが漂っていた。いつか私は、自分の中にある和的なものを自由に表現したいと思う。自分の内側の奥深くには「日本人性」とでも呼べるようなものが眠っている。それを呼び覚まし、曲として表現すること。自分の日本人性に音という息吹をもたらすこと。その実現に向けて今日もまた実践を重ねていきたい。フローニンゲン:2018/5/6(日)07:04

#### 2525. 日常の背後に遍満する輝き

辺りは相変わらず穏やかな雰囲気醸し出している。雲一つないライトブルーの空、そしてその空を舞う鳥たちの姿が見える。優しい春の風がフローニンゲンの街を吹き抜けている。そんな日曜日、今日も昼時となった。昼食前に午前中の取り組みについて振り返っておきたい。

午前中は、まず過去の日記の編集に取り掛かった。計画通り、20本ほどの日記を編集し終えた。ここからは、協働執筆中の書籍の原稿に目を通そうと思ったが、それをせずに、森有正先生の日記に目を通した。しばらく森先生の日記に目を通した後、今度は辻邦生先生のエッセーに自然と手が伸びた。

---

本書は、辻先生の旅に対する考えや思い出が詰まっているものであり、10年間にわたって書き続けられたエッセーの全てが収められている。それを読みながら、自分がこの欧州で経験してきた旅の思い出が自然と思い出されてきた。また、これからの旅に思いを馳せるかのように、辻先生のエッセーを食い入るように読んでいた。夕方あたりにでもまた続きを読み進めたい。

日常が輝いているという体験をしたことはないだろうか。このところ、日常の輝きが異常なほどに表に露わになっているように知覚される。それはフローニンゲンが春の季節に入ったことにより、世界が明るくなったことだけに起因しているものではないと思う。きっと自分の中の何かが変わったのだ。

長い冬の時代を抜け、それと同時に、自分も何かから抜け出したのである。新たな自分が誕生したことが、世界を新たに眺めさせることを可能にしているのだ。

日常の輝きは本当に至る所にある。全ての存在の中に固有の輝きがあり、この世界は無数の存在で溢れているがゆえに、輝きは这个世界に遍満しているのだ。そうした輝きを感じているだけで、時間が気づかぬうちに経っていく。また、そうした輝きによって喚起される無限の内的感覚を思うと、創造行為に絶え間なく従事できるような気がしている。日記の対象として書くことや、曲として表現する対象は本当に日常の至る所に溢れているのだ。

いかに些細に思える事物事象も、その中には観察に資する輝きがある。そしてそれは、形として表現されるにふさわしいほどの価値と尊さを持っている。そうしたものを表現していかなければならない。そんなことを思った。

今から昼食をゆっくり摂ろうと思う。その後に協働執筆中の書籍の原稿をレビューする。ある程度仕事が進んだら、そこで一度昼寝をする。昼寝から目覚めたら一曲ほど曲を作りたい。

日常の背後には、儚さが生み出す静かな流れが存在している。最近それを強く知覚している。興味深いことに、儚さが生み出してるはずのこの流れは永遠性を帯びていることに気づく。だからこれに気づいている時、私はとても安らかな気持ちになるのだ。

---

儚さの先にある永遠性。そしてそれがもたらす安らかさ。この安らかさの中で、今日の残りの時間を過ごしていきたいと思う。フローニンゲン:2018/5/6(日)12:24

## 2526. 羽のような日曜日

今日はどこか優しい羽のような一日であった。まだ今日という日を締めくくるには早い、早朝から夕方までの時間帯までそのような感覚を感じている。

「羽のような一日」それは決して翼のような一日ではなく、もっと柔らかく優しげな綿のような一日だったということだ。時間的に空間的にもそうだったとしか言いようがない。

時刻は夕方の六時に近づいてきている。この時期のフローニンゲンにおいて、この時間帯はまだまだ正午のような雰囲気を持っている。

先ほど久しぶりに知人たちの文章を読んで、あれこれと色々なことを考えていた。あるいは、私に何かを考えさせてくれたと言ってもいい。それらは未だ明確な言葉にならず、自分の身体や存在空間の中で原型として浮かんでいる。この「名づけを超えた絶対的な直接体験」について、先日の中欧旅行の際にも考えさせられていた。

私たちは日々、無数の絶対的な直接体験をしている。だが、その体験の本質にまで私たちが立ち返ることはなく、いつもそこでなされるのは体験の名付けに留まるか、体験そのものを見過ごすかである。言葉にならないような体験を日々積み重ねていく中で、私はできるだけその直接的な体験の中に留まりたいと思う。そこには当然ながら名付けに対する衝動が生じたり、体験そのものを見過ごしてしまうような軽薄な傾向が見え隠れする。

この絶対的な直接体験の中に、自分の固有性や人間として生きるものの意味があるのではないか。そのようなことを思うようになった。

五時半に起床してから夕方の六時を迎えるにあたって、私は今日もまた、一日が確かにあったのだということに強く驚かされる。昨日と同様に、今日もできる限りの創造活動に従事していた。今は修練の時であり、自分の中で今見えている結界を越えていくための準備の時期だ。創造に明け暮れ

---

る日々。日が明け、そして暮れるのと同様に、永遠に営まれていく創造活動への没入。それが実現することを強く望む。

そして、その実現に向けて毎日少しずつ進んでいくことを自らに改めて言い聞かせる。毎日毎日このようなことをしているように思う。何度繰り返してもいい。それが実現されるまで繰り返し自分に言い聞かせ、繰り返し実践に明け暮れた日々を歩いていくことが何よりも大切だ。なぜなら、差異は反復に宿るのだから。差異を生む反復が生まれてくる根源に触れながら生きること。おそらくそれが大切なのだろう。

今見えているもの、感じられるもの、聞こえるもののさらに奥深くにあるものを捉えるようにすること。現在の知覚を超えた知覚世界を把握しようと絶えず努めること。内外の世界はいつも私を超えているが、その差分に気づき、自らをそこに引き上げていく試みに着手すること。そうしたことを忘れてはならない。

日曜日これから夜に向かっていく。ここからしばらくは、協働プロジェクトに関するレポートを作成していく。この時間帯までその着手を引き延ばにしてしまったが、ここから集中して取り掛かる。もう一度今に集中したいと強く思う。今の中に常に自己の本質があるのだから。フローニンゲン:2018/5/6(日)18:01

## 2527. 経験と叡智

一つの週が終わり、新たな週がやってきた。今日は六時に起床し、六時半を迎える少し前から一日の活動を開始した。

月曜日ということもあつてか、昨日とはまた異なる時間がフローニンゲンの街に流れているように思う。今日も雲ひとつない快晴であり、早朝の優しい太陽光が赤レンガの家々の屋根を照らしている。小鳥のさえずりが爽やかな風に運ばれてくる。天気予報の通り、先週の金曜日から日曜日にかけては本当に天気が良かった。

---

小雨が降ることは一度もなく、雲ひとつない晴れた日が続いていた。それは今日明日と続くらしい。しかしどうやら、明後日からは小雨が降る日に戻るそうだ。一日を通じて、その日のどこかで小雨が降るというのはフローニンゲンらしくていい。こうした変動性の激しい天気にもすっかり慣れた。

気づけばこの地での生活もあと三ヶ月ほどで三年目を迎える。この二年間の時の流れは緩やかであつたが、同時に確かな足取りがそこにあつたと思う。これまでの二年間で得たことは、この人生の中でも極めて重要なものばかりであつた。欧州での三年目の生活は、この二年間で得られた経験の総括的な年としたい。

もちろん、また新たな経験を私は積むことになるだろうが、この二年間で得てきたものをさらに深めたいと思う。これまでの経験を深めることそのものが、新たな経験となる。経験について書き留めっていると、起床直後に入れたお茶のティーバッグに付されていた言葉を思い出す。「経験は叡智をもたらす」という言葉がそこにあつた。

経験というのはまさに叡智をもたらし得るのだ。いや、諸々の体験が自らの経験にまで真に深められた時、それはそのまま叡智となるだろう。ということは、私がやるべきことは、やはり既存の体験を経験にまで昇華していく試みだろう。とにかく、この二年間で積むことのできたかけがえのない体験の一つ一つを経験にまで深めていきたい。それが実現した時、真の叡智に至るだろう。そのようなことを早朝に思う。

フローニンゲンを吹き抜ける早朝の風は本当に心地が良く、小鳥のさえずりも私の心を本当に落ち着かせてくれる。ここしばらく、ずっとバッハの楽曲を聴いているように思う。スヴァトスラフ・リヒテルとフリードリヒ・グルダの演奏をもっぱら聴きながら書斎で過ごす毎日となっている。今この瞬間も、リヒテルの演奏を聴いている。

演奏に関する技術的なことはほとんどわからないが、毎日10時間以上その演奏を聴いているのであるから、きっと私を捉えてやまない芸術性がそこにあるのだろう。頭ではわからないが体でわかるもの。あるいは存在だけがわかっているもの。そうしたものを本当に大切にしたい。そうした体験の中に経験への道がある。今日もリヒテルの演奏だけを聴き続ける。

---

書斎にいる間中ずっとリヒテルの演奏に耳を傾けよう。そうすれば、徐々に見えてくるものがあるだろう。少しずつ明るみになってくる事柄を主発点にして、また新たな探究に乗り出していきたい。フ  
ローニンゲン:2018/5/7(月)06:43

## 2528. 感動の原形質と新たな真実

遠くの方で小鳥が高らかな鳴き声を上げた時、ふと今朝方の夢の内容について思い出した。起床直後は夢の印象が鮮明な余韻として残っていたが、それを言葉にするのは幾分難しかった。起床からしばらくした今でもその困難さに変わりはないが、覚えている範囲のことを簡単に書き留めておきたい。夢の中で私は、複数の友人から異なるコンサルティング業務の依頼を受けていた。

依頼を受けたコンサルティング業務の範囲はそれほど広くなく、仕事の量もそれほど多くない。友人たちは一様に見積もりを欲しがっていたので、見積書をこちらの方で作成した。ある一人の友人が見積書をもとに、個別の業務内容についてより詳しく話をしたいと述べたので、一度直接会って話をすることにした。彼が抱えている錯綜とした課題を一つ一つ紐解くかのように、できるだけ順を追って説明をした。

すると、友人はとても納得したような表情を浮かべ、私はそこで正式に彼からの依頼を引き受けることにした。彼との打ち合わせが行われていたのは、欧州のどこかの国の街の中心部だ。品の良いホテルのロビーで待ち合わせをし、実際の打ち合わせはなぜかホテルの外で行われた。友人との打ち合わせが無事に終わり、その帰り道、突然銃声が後ろから聞こえた。

その音の方向を振り返ると、一人の変装した男が市民に向けて発砲をしていた。だが、市民に弾を当てるといような意思をそれほど感じず、どこかそれは威嚇射撃のように見えた。私は一旦近くの電話ボックスの裏に身を潜めた。なぜか私は、彼の本当の標的は自分であることに気づき、そして自分は民間人を守る立場にあることに気づいた。

発砲した男が変装をしていたのと同様に、突然私も身なりが変わり、その男を撃退するための格好になった。私がその音の方へ静かに歩み寄っていかうとしたところで夢の場面が変わった。

---

そのような夢を見ていたことを覚えている。それら一連の夢の前後にはまた別の夢があった。特に、それらの夢の前に見ていた夢がどこか感動的な内容を持っており、その余韻が起床直後の自分の内側にあった。昨日もとても感動的な夢を見ていたが、結局その内容については思い出すことができなかった。二日続けて自分の心を揺さぶるような夢を見ていたが、その内容を一切思い出すことができない状況にある。

それらの夢の内容は、明確な形になることを待っているのか、それとも日々の生活の中で見えない形で滲み出しているのかどちらだろう。あるいはその両方かもしれない。日々が言いようもない充実感や幸福感で満たされているように感じるのは、もしかすると深層意識の中にある感動の原形質と呼ぶべきものが、絶えず感動の流れを生み出してくれているからなのかもしれない。

今のところこの説明が最もしっくりくる。自分の内側に感動の根源質があり、それが絶え間ない感動の流れを生み出している。そしてその流れが日々の生活の隅々にまで染み渡っているということを実感する。その実感はとても強い。

感動の原形質が日々の幸福感を生み出す流れを司り、感動が毎日の生活の隅々にまで滲み出している、という説明はまさに肚に落ちる感覚で理解できる。それはきっと自分の中の新たな真実だ。この新たな真実に基づいて、今日という一日を過ごしていく。フローニンゲン:2018/5/7(月)07:06

#### 2529. 国際ジャン・ピアジェ学会に向けて

新たな週を迎えた月曜日の今日、まずは協働プロジェクトに関する報告用のレポートを作成したい。これは昨日から取り掛かっていたものであり、今日の午前中を使えばかなりの部分が仕上がると思う。その作業に目処が立てば、午前中のうちに一つ論文を読んでおきたいと思う。この論文は、現在執筆している論文で用いているものであり、具体的には、研究データを定量化する際の三つの基準のうちの一つを司るものだ。

複雑性科学の領域に固有な概念は何かをリストアップする際に活用したのがこの論文であり、今日は論文で取り上げられている用語の一つ一つに改めて目を通していきたいと思う。おそらく自分の中で抜け漏れている用語があるはずであり、そうした言葉の理解を深めたい。いかなる仕事に従事

---

しようとも、言葉の理解は不可欠であり、そうした理解は絶えず深まっていくものなのだ。この論文に目を通したら、おそらく昼食を摂る頃になるだろう。

今日は昼食を摂ってしばらくしたら、論文アドバイザーのミハエル・ツショル教授とのミーティングがある。研究の方は非常に順調に進んでおり、論文の執筆も大部分を終えることができている。ここからは論文で記載する内容をより深めていくことに意識を向けていく。今日のミーティングは、その実現に向けた話し合いをツショル教授と行うことになっている。

研究ミーティングがあるため、今日は昼食後に作曲実践をすることはできないだろう。バルトークの『ミクロコスモス』に範を求めて、一曲ほど短い曲を作ることなら可能かもしれない。時間の余裕を見て、作曲をするのかどうかを判断したい。仮に作曲実践に時間を充てることができなければ、研究ミーティングを終えて夕方に自宅に戻ってきてから、ゆっくりと作曲実践を行おうと思う。

焦ることなく、一つ一つの実践を大切にしていこう。一つの実践から得られる学びを最大のものとし、その学びを次の実践につなげていく。一つ一つの実践を大切にするという姿勢と、そこから得られた学びを次の実践につなげていくという学びの連鎖を途切れのないものにしていく。夕方の作曲実践を終えたら、協働執筆中の書籍の原稿のレビューを行いたい。

このレビューに関してもこの二日間を使って少しずつ進めてきた。今日それに取り掛かることで、一通り全体に対するレビューを完成することができるだろう。あとは次回の打ち合わせの前にもう一度自分のレビューコメントを眺め、何か追加することや修正することはないかを確認していく。

昨夜は、いよいよ今月末に迫った国際ジャン・ピアジェ学会に参加するために、学会会場近くのホテルを予約した。この学会の開催場所はアムステルダムであり、オランダ国内で開催されるものだが、フローニンゲンからアムステルダムまでの距離を考えると、学会期間中は現地に宿泊をした方が賢明だろうと思われた。

今回の学会は、アムステルダム中央駅から一駅ほど南に下った場所にあるアムステル駅付近のホテルで行われる。学会の前日に三年振りにヴァン・ゴッホ美術館に足を運びたかったのと、会場周辺を歩いて散策したかったこともあり、ちょうどゴッホ美術館と学会会場との間のホテルを予約することにした。

---

---

宿泊先のホテルから学会会場へとつながる道をまだ歩いたことはなく、途中で渡るアムステル川の眺めも今から楽しみだ。当の学会では、ちょうど開催日の真ん中の日の最後に私の発表がある。発表に向けた資料作りを来週末あたりから始めたいと思う。今回は数多くの著名な発達科学者が世界各国から参加することもあり、今から期待感が高まる。

学会でのスケジュール表を眺め、そこでの発表内容の概要を読むだけで、自分にとって非常に意味のある学会になるだろうということがわかる。現在行っている研究に関しても、査読付き論文を出し、どこかの学会でまた発表をしたいと思う。フローニンゲン:2018/5/7(月)07:27

### 2530. 初夏の雰囲気漂うフローニンゲン

今日も昨日に引き続き、晴れ渡る素晴らしい一日だった。その素晴らしさは、実際に外に出かけてみることによって、体感として感じられた。

今日は昼食後に、研究アドバイザーのミハエル・ツショル教授とのミーティングのためにキャンパスに向かった。自宅を出発してみると、そこに広がっていたのは雲ひとつない広大な青空だった。一点の雲もなく、成層圏が手に届きそうな青空が目の前に広がっていた。私は何度も空を見上げ、その広大さと美しさに見入っていた。

今日の気温は20度を超えており、歩いていると途中で若干暑さを感じるほどであった。私は長袖を着ていたが、今日は半袖でもちょうどいいぐらいであった。運河の表面が太陽の光で輝き、時折吹く風はとても心地良かった。このように素晴らしい天候であったため、キャンパスに行く途中にあるノーダープラントソン公園の様子がどのようなものであるかが気になってしょうがなかった。

実際にそこに到着してみると、初夏を思わせる輝きがそこにあった。生命たちは各々躍動し、目に映る全てのものが輝いているかのようにであった。公園の芝生には本当に無数の人がいて、各自シートを広げ、その上で談笑をしたり、日向ぼっこをしている。今日が月曜日とは思えないほどのゆったりとした時間の流れが、ノーダープラントソン公園のみならず、フローニンゲンの街全体にあった。それは初夏に向かう春のフローニンゲンの素晴らしさだろう。

---

キャンパスに到着する頃には、どこか幸福感に満たされたような気持ちがあった。これまで何度となく歩いてきた道をただ歩くだけ。このただ歩くだけの中に幸福を感じられることほど素晴らしいことはないだろう。

幸福に至る道はシンプルなのだ。全くもって複雑なものではない。何気ない日常の中に幸福があり、何気ない日常が即幸福となる。そんなことを強く実感させてくれる外の雰囲気だった。

キャンパス内のいつものカフェに到着し、パソコンを立ち上げ、ツシオル教授の到着を待った。今日のミーティングで取り上げる書きかけの論文を開くと、程なくしてツシオル教授がやってきた。論文の進捗は至って良好であり、この論文を基に査読付き論文にするためのアイデアを早くも話し合った。研究の当初こそ紆余曲折があったが、ここに来て論文が一気にまとまりを見せ、このままの形で修士論文の提出を行えそうだ。

もちろん、これからより詳細を詰めていく必要があり、その点についても今日のミーティングで話し合った。具体的には、定量分析に関しては今回の研究ではこれ以上深くできないところまで到達しており、仮にもう一つ分析を加えたら、それは修士論文の範囲を超えてしまう。ツシオル教授の方で試してみたい分析手法があるようであり、それは査読付き論文を執筆する際に試すことにした。定量分析を加える代わりに、定性分析を一つ追加することにした。

今回研究対象としているMOOCのうち、フラクタル次元でユニークなものを持つレクチャービデオを二つ取り上げ、それらを比較することにした。一つは時系列データがピンクノイズを発しているもの、もう一つはホワイトノイズを発しているものを取り上げ、それらのレクチャーが実際にどのような内容を持っているのかを詳しく分析していくことにした。

この時、七週にわたって行われた今回のMOOCのうち、異なる週の中から二つの事例を取り上げてもいいが、できれば同一の週の中で異なるフラクタル次元を持っているものを取り上げたいと思う。さらには、それらの講義が連続していればいるほど比較がしやすいため、理想としては二つの連続する講義を事例として取り上げ、それらを詳しく分析していくようにしたい。

この定性分析に加え、“Introduction”のセクションの先行研究をもう少し追加し、各定量化基準をそれぞれ別々に紹介するように文章を修正していく。これらの作業を今週末と来週にかけて行い、そ

---

---

のドラフトをツショル教授に送りたい。ここまでが完了すれば、あとは微調整を行うだけで修士論文が完成となるだろう。修士論文の提出が終われば、そこからは査読付き論文の執筆に向けてツショル教授と協働を継続させていきたいと思う。フローニンゲン:2018/5/7(月)16:30

#### No.1007: A Resplendent Flow

This is the next morning after I came back to Groningen from Amsterdam. Today's temperature is low, and it is cloudy, but I can feel a resplendent flow within myself. Groningen, 10:57, Sunday, 6/3/2018

### 2531. 曲が持つ自己組織化力

名前の知らない木の葉が夕方の風に揺られている。葉の揺れに伴って、夕日に照らされた木の輝きが瞬間瞬間変化している。

時刻は夕方の七時半を回った。相変わらず外は明るい。一日一日と夏に向かっていくに従って、日は延びるばかりである。今日はとても暖かい一日であり、明日明後日も暖かい一日となる。だが、木曜日からはまた少し寒さが戻るようだ。そんなことを夕方に立ち寄ったチーズ屋の店主は述べていた。

先ほど浴槽に浸かりながら、作曲実践について振り返っていた。今日は昼食後に一曲ほど作り、夕方に大学から帰ってきてからも一曲ほど作った。興味深いことに、曲には一つ一つ異なるエネルギーが流れていることがわかり始めた。それも明確な形としてそれを知覚することができ始めている。

曲が喚起する感情エネルギーの流れのみならず、曲を曲たらしめているよりマクロな力——それは構造エネルギーと呼んでもいいかもしれない——が一つ一つの曲に存在していることが見え始めた。おそらくこれは、曲の「自己組織化力」だと呼べるに違いない。

曲が始まりから終わりまで向かっていく自発的なエネルギーをそこに見て取ることができる。それゆえに、先ほどの作曲実践を通じて、曲に流れている自己組織化力を無理に遮断するような形で曲を終わらせようとする、曲の終わりが力のないものになってしまうことに気づいた。それは、曲が静

---

かな音で終わるか否かの問題ではない。曲を曲たらしめる張力の問題であり、その張力を生んでいるのが、この自己組織化とでも形容できるものなのだとわかった。

これまでも何度となく違和感のある曲を作ってきた。曲の途中や終わりにそうした違和感を感じることが多い傾向があり、そうした傾向を生み出していたのは、まさに曲の中に潜む固有のエネルギーの性質に私が気づけていなかったことが挙げられるだろう。

最初から最後まで必然的な流れで完結していく優れた曲をより注意深く聴かなければならない。しかも、それを単に聴くだけではなく、曲を分析し、分析から再び総合に向かう形で身体や存在を通じてその曲を聴いていく。分析的に対象と接しない者には何もわかってはこない。また、分析から総合に向かう形で対象と接しない者にはそこから一步奥の世界が見えてはこないのだ。それを肝に銘じなければならない。

思考による分析を進め、身体や存在を通じて曲を再度聴いていく。いや、思考も感覚も全て総動員して分析を進め、全ての感覚を統合的に発揮した形で曲と接していく必要があるのかもしれない。とにかく、一つ一つの曲に潜む神秘、曲そのものが持つ神秘的な特性をもっと深く知っていきたいと思う。

浴槽に浸かりながら考えていたもう一つのことは、作曲の原則に「できるだけ“step motion”を使い、程よく“skip motion”を入れていく」というものがある。前者は、一度音符を上げ下げすることであり、後者は二度以上音符を上げ下げすることを指す。浴槽の中でこの原則の言わんとすることが体感的に理解できた。仮に後者を多用した場合、曲のフラクタル構造がホワイトノイズを発してしまうのだ。

つまり、そこには安定性のかけた激しい変動性が曲の中に生じてしまう。一方、前者をできるだけ活用し、ところどころに後者の動きを取り入れていくというのは、まさに程よい変動性を持たせるという意味で、ピンクノイズのフラクタル次元を曲に付与することに他ならない。そんな閃きが先ほどあった。この閃きを基にすれば、その原則の妥当性がより強くなっていく。浴槽の中で、試しに変動性の激しいメロディーを作ってみたときに、確かにそれは音楽としての体をなしていなかった。

---

逆に、変動性の低いメロディーを作ってみても、同様に違和感のある音の集合が生まれた。曲に程よい変動性をもたらしていくこと。それが作曲の原則にある。変動性をもたらす対象は複数あり、例えばメロディー、リズム、ハーモニーという音楽の三要素などが挙げられる。その他にも変動性をもたらす対象は考えられるのだろうが、とりあえず私はそれらの三要素を意識しながら調和の取れた変動性を持つ曲をこれから少しずつ作っていきたいと思う。言うは易し行ふは難しだが。フローニンゲン:2018/5/7(月)19:48

#### No.1008: An Orange Steamship

My feeling at this moment is like going aboard an orange steamship. Groningen, 09:12, Monday, 6/4/2018

#### 2532. 豚の腹を叩く音

今朝は六時前に起床し、六時を少し過ぎたあたりで一日の活動を開始した。起床直後にまず取り掛かったのは、デッサンであった。起床してすぐに浮かんできた内的感覚を絵として形にした。特に何か明確な目的があってこれを行なっているわけではないのだが、それをすることがすっかり朝の習慣になった。逆に言えば、それをする必然性のようなものが自分の内側にある。そうした必然性が、内的感覚を外側に形にしようとする運動を始める。

改めてふと気づいたが、例えば朝の六時半から活動を開始した場合、少なくとも九時までは自分の創造活動に時間を充てようと思う。実はそれはすでに今までにも行われていたことなのだが、これからはなお一層それを意識しようと思う。午前中の早い時間帯は、とにかく自分の創造活動に従事する。心身を一日の活動に向けてゆつくりと準備するかのように、自分の創造活動に静かに営む。そんな形で早朝の時間を過ごすのがいいだろう。

日記を書くというのはその実践の一つであり、作曲というのも今後その実践に加わるだろう。今は昼食後や午後の時間に作曲を行うことが多いが、これからは徐々に早朝の時間に曲を作ることができればと思う。

---

日が昇るのが早くなったせいか、それにしても現地人の活動の開始は早い。ちょうど今日は、目の前の通りの雑草を除去するために清掃員が六時半前にやってきて、早朝のこの時間帯から除草機の音を鳴らし始めた。時刻は六時半を迎えたばかりであるため、心なしか除草機の音は控えめだ。この時間帯から働いている人がいるということに驚くと共に、その姿勢には感銘を受ける。

自分も早朝の仕事に励む必要がある。自分の仕事とは言うまでもなく、創造活動だ。絶えず、内側のものを外側に形として残していくこと。それが自分のライフワークだ。

今朝方見ていた夢について思い出す。夢の中で自分が大いに笑っており、それによって目覚めるような夢。目が覚めか否かの時、夢の中だけではなく、ベッドの上にいる自分も声を上げて笑っているような夢だった。その笑いを引き起こしたのは、大学時代の先輩との些細なやりとりだった。

その方は大学時代の四年間を通じてお世話になった先輩であり、卒業後は、三年前に東京に一年間ほど住んでいた時に一度その先輩と昼食を共にした。今その先輩はニューヨークにいる。オランダで生活を始めてからの夢の中で、その先輩が過去何回か現れているのはどこか不思議だ。何かしらの意味がそこにあるのだろう。

夢の中で笑っていた事柄はあまりに些細なことであった。自分のお腹を叩く音が豚か何かのお腹を叩くのと同一音がするという気づきを得たことだった。それはその先輩に指摘されたものだったように思う。

夢の中でもう一つ印象に残っているのは、駅のプラットフォームのような場所に立っていると、二人の人間が乗れるような小さな乗り物が次から次へと駅構内にやってきたことだ。この駅はある大学のキャンパスの中にあり、その先輩曰く、それらの乗り物は理系の敷地内を走っているそうだ。逆に言えば、文系の敷地内にはそのような乗り物はないということを暗示していた。私はその乗り物に乗って目的地に向かうのが良いのか一瞬ためらった。

そうしたためらいが生まれた時には、すでにその乗り物はプラットフォームから出発をしていた。そこで私は、頭の中でもう一度現在地から目的地までの地図を広げた。飛行機で行くのか、電車で行くのか、バスで行くのか。それら三つの選択肢が私にはあった。

---

飛行機で行っても、電車とバスを乗り継いで行くのも大して時間は変わらないようであった。時間にしてわずか20分ほどである。そんな計算をしていると、夢の場面が変わった。

今朝方の夢について覚えているのはそれぐらいであろうか。とにかく、自分のお腹を叩く音と豚のお腹を叩く音が似ているというのは、とてもおかしな気づきであった。その気づきに対して夢の中でも、そしてベッドの上でも私は大笑いをしていた。フローニンゲン:2018/5/8(火)06:51

#### No.1009: A Walk in the Summer Sky

After I was immersed in the feeling that as if I were taking a walk in the summer sky, it started to become sunny in Groningen. Groningen, 11:00, Tuesday, 6/5/2018

### 2533. 今日一日の活動内容

昨日、論文アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授とミーティングをした時、修士論文の最終的な提出期限は八月の末なのだが、当初の予定通り、六月の中旬に論文を提出する意向を改めて伝えた。論文さえ提出できれば夏の休暇に入ることができるということもあり、昨年と同様に、六月の中旬には論文を提出しておきたいという考えがあった。

早く論文を提出し終えたら、すぐに夏の休暇に入ることができるだけでなく、今回の修士論文を基にした査読付き論文の執筆に取り掛かることもできる。今回の修士論文の提出をもってして、無事に今回のプログラムを終了するのであるから、そこからはずっと休みといえども休みであり、協働プロジェクトと自分の創造活動に従事し続けるという点において休みでないといえども休みでない。

いずれにせよ、論文は六月の中旬に提出し、六月末にロンドンで行われる学会に向けた準備に集中したいと思う。今回三つ目の修士号を取得し終えたら、九月からの一年間は、どこかの大学に所属するのではなく、自らの関心だけに純粹に従った探究をこの書齋の中で進めていこうと思う。

この九月からの一年間は、来年の九月から再度どこかの大学期間に所属するための充電期間となり、自らの創造活動に旺盛に従事するための期間となる。今年は幸運にも時間があるため、幾つかの協働プロジェクトに並行して携わることができるが、来年からはそれが可能かどうか分からない。また、自分の中で、次に大学に所属することになった時には、学術研究と日々の創造活動だけに集

---

---

中した方がいいのではないか、という考えも最近浮かぶようになってきた。それを見越して、今年は様子を見ながらどのような協働プロジェクトに参画させていただくかを意思決定していきたいと思う。

昨日と同様に、今日も穏やかな早朝だ。街路樹の雑草を除去する清掃員はどこかにいなくなってしまう、今はその姿を見ることができない。除草機の音が聞こえなくなった代わりに、小鳥のさえずりが聞こえ始めた。早朝の太陽光が、赤レンガの家々や街路樹を照らしている。そうした世界の中を、早朝の涼しい風が駆け抜けていく。今の私はそんな世界の中にいる。そしてそれが自分の世界である。

今日は午前中に、一昨日から取り掛かっている協働プロジェクトに関するレポートを作成していきたい。今日の午前中の時間を充てれば、おそらく最初のドラフトが完成すると思う。一日でドラフトを完成させるのではなく、毎日少しずつ文章を書いていくという方法で取り組むことの大切さを知る。集中力の面でもそうであり、質の面でもそうである。

小さく積み重ね、それが結果として一つの大きな総体になるように全ての仕事を進めていく。レポートのドラフトが完成したら、昨日読むことのできなかった論文に目を通したい。この論文は現在取り掛かっている研究で引用する論文の一つであり、複雑性科学という領域における重要な概念を取り上げ、それらについて一つ一つ解説を施しているものだ。

ここで再度、複雑性科学という領域に固有の概念を押さえておこうという考えを持った。この論文を読み終えたら、ちょうど昼時になるだろう。昼食後からは作曲実践を行う。その後、協働執筆中の書籍の原稿のレビューに取り掛かり、こちらも今日中にレビューの一回目を終える。あとは時間が許す限り、辻邦生先生の『遙かなる旅への追想』というエッセー集を読む。そんな形で今日一日を過ごしていきたいと思う。フローニンゲン:2018/5/8(火)07:18

## 2534. 生きた絵画の恩恵

これまで何度か日記で書き留めているように、私はいつも書斎の中で、外に広がる景色が見れる窓の方を向きながら仕事を行なっている。この窓はちょうど大型テレビぐらいの横広がり大きさを持つ

---

ている。その窓から見える景色の有り難さを先ほどはたと気づかされた。ちょうど朝食のリンゴを食べながら、私は壁に飾っているニッサン・インゲル先生の二枚の絵画作品を眺めていた。

そこでふと視線を書斎の窓の方に向けると、窓の向こうに広がる景色の素晴らしさに静かな感動を覚えた。もちろん、インゲル先生の二枚の絵画は素晴らしい作品である。しかし、仮に人間の手によって作られた絵画から生み出された美と、窓の外に広がる自然の絵画的な美のどちらを取るかと言われたら、私は後者を選ぶかもしれない。刻一刻と移り変わるその景色には、生々流転する森羅万象の真理が顕現されている。

欧州で過ごす日々が毎日これほどまでに充実しているのは、やはりこの窓から見える景色のおかげなのかもしれないと改めて思う。どんな名画よりも素晴らしい美を自然は私たちに提示してくれる。それはもしかしたら、音楽に関しても当てはまることかもしれない。自然は絵画的であり、音楽的である。そしてそれらはどこまでも美しい。

また、私たちは自然の美にも負けない内面の美を持っていることを忘れてはならない。外側の美を模倣する形で何かを創造するのではなく、内側の美から形を生み出していくのだ。そうすれば、内と外の自然はどちらも共存し、さらに包括的な美を私たちにもたらしてくれるだろう。自然の美と内面の美の双方を大切にしたいと強く思う。窓の外に広がる生きた名画は、そのようなことを私に教えてくれた。

ちょうど今、先日作曲した曲を何度も繰り返し聴いている。それはブダペストに滞在していた時に、バルトークの曲に範を求めて作ったものである。この曲を聴きながら、音楽的なものと絵画的なものとの関係について少しばかり考えが浮かぶ。一昨年の夏に訪れたメンデルスゾーン博物館で目にしたメンデルスゾーンのスケッチ、そして今年の春に訪れたショパン博物館で目にしたショパンのスケッチが静かに記憶の淵から立ち現れてくる。

二人の偉大な作曲家が共にスケッチを愛していたことは興味深い。作曲と絵を描くことの間にはやはり何か見過ごすことのできない関係性があるにちがいない。音楽と絵画の親和性は以前から感じていることであったが、それがますます確かな感覚になっていく。今、書斎のソファーには楽譜と画集で溢れている。

---

ソファの上を芸術専用のスペースにしようと思い立ったのは昨年あたりのことだった。音楽と絵画が、本当に自分の人生と切っても切り離せないものになっていることに気づく。楽譜や画集を眺めることにより、いつも何かしらのインスピレーションを授かっている。これからは、そうしたインスピレーションをもとに、より一層創造活動に打ち込んでいきたい。

自分で曲を作り、自分で絵を描く。いつの間にか自分の情熱の向かう先が芸術活動になり始めている。そうした生き方を望んでいた自分がどこかにいたようであり、そうした生き方を望んでいる自分が今ここにいる。芸術活動だけに専念する日を迎えることができるように、今日もまた一つ一つの実践を積み重ねていきたいと思う。フローニンゲン:2018/5/8(火)08:47

### 2535. 生きる意志・自由・創造の流れ

小鳥のさえずりが聞こえる夕方の五時。辺りは強い西日で照らされている。

昨日ふと、灰色の街に宿る小さな輝きについて思いを巡らせていた。そうした思いが現れたのは、ちょうどその時にワルシャワに滞在していた時の記憶を辿っていたからかもしれない。ワルシャワの街が裏の顔として持つ侘しさが今もありありと蘇ってくる。今この瞬間に私がいる場所はこんなにも明るさを持っているのに、どうしてそのようなことを思い出したのだろうか。

もう少しワルシャワで感じたことを思い出していると、あの街のそこかしこに、小さな輝きを見出したことも確かであった。それは本当に小さな輝きであったが、確かにあの街に遍満していた。その輝きはおそらく、人が生きることに宿る固有の性質から生み出されたものに違いない。そうした輝きは、生きる意志の表れとでも呼ぶべきものだろうか。

それは仮に明示的なものではなくとも、生きることに向かっていこうとする確かな力のように思えた。そして、今そうした生きる意志が、自分の内側に存在している何らかの形になろうとする力と密接に関係していることに気づかされたのである。自分の中で激しく流れる形になろうとする力、そして形を生み出そうとする力は、生きる意志と密接に関係していたのだ。生きる意志と形を求め形になろうとする力が明確なものとして自分の内側で知覚される。

---

それに応じて、自由の意味が少しずつ見えてきた。私は少しずつ内なる自由を通じて生きられるようになってきているのではないか、そんなことを先ほど思った。少しずつ自己への囚われから解放されつつあるのを確かに感じる。そうした自己解放をもたらしてくれているのは創造活動であることに気づく。創造することは自由になることなのではないか、そんなことを思う。囚われから解放されようとする衝動と創造の衝動はどこか近いものがあるように思えてくる。

デッサンを始めてから内側の流れが変わりつつあることに気づく。内的感覚を絵として表現することによって、内側の流れが以前に増してより滑らかになりつつあるのがわかる。こうした感覚の変化が、言葉や曲の創造に繋がっている。内側の流れを淀みないものにしていくために、内側から形になるべきものが形になって溢れてくる。人間の創造力の根源は本当に不思議な性質を持っている。それは無限の泉のような生成力を司っている。

言葉、音楽、絵として自分の内的感覚が少しずつ形になって溢れてきている。その表出方法と具体物はまだとても荒々しい。そうした荒々しさがいつか透明な流れに還っていくだろう。フローニンゲン:2018/5/8(火)17:10

#### 2536. 表現技術の涵養に向けて

昨日とほぼ全く同じ時間に日記を書いているような気がする。そして、昨日と変わらない夕陽の眩しさを感じているような気がする。

時刻は夕方七時半を迎えた。昨日に引き続き、今日も気温が高く、昼前に近所のスーパーに行く時には半袖で十分であった。明日もまた気温は高いままであり、明後日から少しばかり気温が下がる。そんな天気となるようだ。

夕方のこの時間に吹くそよ風を書斎の窓から眺めている。ただ風を眺めているだけなのだが、それだけで心が落ち着いてくる。そよ風によって揺られる木々の葉が、自分の心の波と同調しているかのようだ。内外世界のシンクロナイゼーションをここに感じる。

先ほど夕食を摂りながら、「自分には表現したいことが溢れるように自分の内側に存在しているが、それを表現するための技術が全く追いついていない」ということを心の中でつぶやいていた。表現

---

内容はあるが、技術的なところで課題を抱えているということは、幸か不幸か全くもって正しいと思う。とりわけ作曲に関する技術をどのように高めていったらいいのかに苦心する日々が続く。誰かに師事することなく、今は作曲の理論書も書斎の机の片隅に置かれているような状態である。

では一体何から作曲の技術を学んでいるかというと、過去の楽譜だけを頼りにしている。過去の偉大な作曲家が残した楽譜だけが今の自分の師となっている。正式に師についていないことが望ましいことなのか、望ましくないことなのかはわからない。今の自分は誰か師につくような環境にあるわけでもなく、師事したいと思うような作曲家もいない。そうしたことから必然的に過去の作曲家が残した作品だけが自分の師となっている。

先月、ブダペストのバルトーク博物館を訪れ、そこでバルトークに関連する書籍を購入し、それを眺めた時、「作曲は教えるものではない」というバルトークの言葉があったことを思い出す。当然ながら、理論的な部分や技術的な部分の多くは教授することが本来可能だと思う。だが、バルトークが言わんとしていたことは、技術を超えた部分、すなわち作曲技術の本質とも言えるその個人の固有の思想を固有の形で外側に表現する方法については誰からも教わることができず、むしろそれは自ら形成していくものだ、ということなのではないかと思う。

そうであれば、今自分が歩んでいる道もあながち間違ったものではないように思える。一見するとそれはかなりの遠回りのように見えるが、それでも正しい道を歩んでいるように思えてくる。

書物を通じて学べることは学べるだけ学び、自分の内側で自ら育んでいくしかない自分なりの作曲方法については本当に自分の手で開発していくしかない。今日もこれから本日二度目の作曲実践を行う。とにかく過去の作曲家が残した優れた作品を師とし、自分の内側で表現を待つものがあるべき形で表現できるような技術を獲得していこうと思う。

最後に、夕食前に考えていたことをメモ書きとして残しておきたい。ふと、短調と長調の見分け方の方法を自分の中でより明確に確立したいと思った。具体的には、各調を見分ける、厳密には見るのではなく聴き分けるにはどうすればいいのかを考えていた。より端的には、各調の固有の色や形をよりはっきりと認識したいのである。

---

各調に固有の質感を把握するためには、やはりその調の音を意識的に聴くしかないのだろうか？この点についてはその方法を模索したい。今のところ、作曲をする際には常にどの調を用いているのかを作曲ノートにメモし、その曲を聴きながら内的感覚をデッサンしている。各調と自分の描いたデッサンを比較してみるというのも一つ面白い方法かもしれない。これからは今まで以上に、各調が持つ固有の音色について意識したいと思う。フローニンゲン:2018/5/8(火) 19:47

### 2537. 研究ミーティングに向けて

今朝は五時半に起床し、六時から一日の活動を開始させた。まだ朝日が完全に出ていないためか、今この瞬間の空は明るさを灯す準備をしているかのようである。ここ数日間晴れの日が続いており、今日も晴れになるようだ。夜がいつの間にやら明け、これから世界の明るさが増していくだろう。

書斎の窓から街路樹を眺めてみると、どうやら微風が吹いているようだ。風は目では直接見ることはできないが、木々の葉の揺れを見ることによってその存在を確かめることができる。また、自らが風を肌で感じることによって、その存在を確かめることができる。目には見えないのだがそこに確かに存在しているもの。それが風だ。

私たちの身の回りには、このように目には見えないが確かに存在している事象が数多くある。それは身の回りのみならず、私たち内側の世界においてもそうである。一つの思考や一つの感情は目には見えない。だが確かにそれらは存在している。そうした存在をいかに認識し、それらを形として顕現させていくか。そのような取り組みを今日も行いたいと思う。

今日は午前中に、ザーニクキャンパスに足を運び、研究インターンでお世話になっていた二人の博士とミーティングをする。ザーニクキャンパスまでは歩いて30分ほどであるため、歩いてキャンパスまで行くことはとてもいい運動だ。九時半をめぐりに自宅を出発するが、今日は半袖で出かけてもいいかもしれない。そんな気候だ。

今日のミーティングで話す内容は、現在私が進めている研究についてである。二人の博士のうち、エスター・ボウマ博士がレビューしてくれた論文のデータファイルを昨日送ってくれた。すでに論文は随分と書き進めており、全体の八割近くが完成しているため、読む分量も多かったと思う。それ

---

でもほぼ全てのセクションに目を通してくれたようであり、また随分と多くのコメントを付してくれたことに感謝しなければならない。

もう一人のジャン・フォルカート・ディエナム博士からのコメントは後日もらえることになっている。今日のミーティングの前半では細かな点についてディスカッションするのではなく、大きな観点で研究を捉え直すような意見がもらえるようにディスカッションを進めていきたいと思う。その後、特に“Introduction”と“Discussion”のセクションに厚みを持たせるためのアイデアをもらいたいと思う。そうしたことを行っていると、おそらく一時間があつという間に過ぎていくのではないかと思う。

ザーニクキャンパスから戻り、昼食を摂ったらすぐに一件ほど協働プロジェクトに関するミーティングがある。昨夜も少しばかり考えていたが、今後はあまり多くのプロジェクトを同時に進めるのではなく、ごく少数のプロジェクトに参画するようにしたい。

今の私は自分が何を優先させるかを知っている。どのような活動に自分が心底取り組みたいと思っているのかをすでに知っている。あとはそれに専念できるような環境を自ら作り上げていくことが大切になる。

赤レンガの家々に朝日が反射し始めた。書斎の窓を開けると、ひんやりとした新鮮な空気が流れ込んできた。今日は今日という完全な一日であり、固有の充実感を持った一日になると予感している。  
フローニンゲン:2018/5/9(水)06:24

### 2538. 絶え間ない揺らぎの中で

今朝方、ワルシャワを訪れた時の日記を読み返してみると、旅が自己を深めていく働きの存在についてまた見えてくるものがあった。ワルシャワに滞在中、その日に体験したことや考えたこと、そして感じていたことは無数に存在していたにもかかわらず、それがうまく言葉にならないという状態にあった。そうした現象を引き起こしていたのは、まさに旅がもたらす揺らぎに他ならないということに気づかされた。私たちは揺らぎを通じて自己を深めていく。

厳密には、私たちは絶えず揺らぎの中で生きているのだが、私たちの自己を深めるに資する波形の揺らぎが存在しており、旅は往々にしてそうした揺らぎを私たちにもたらす。こうした揺らぎの経験

---

をするとき、うまく自らの言葉を紡ぎ出すことが一時的にできなくなるのではないかと思われた。というのも、自己を深めていく揺らぎというのは、既存の自己を超えているがゆえに、今の自分の言葉ではうまく表現できない類のものなのだ。ワルシャワに滞在していた私は、まさにこうした揺らぎの中にあったと言ってもいいだろう。

そうした揺らぎの中で、私は少しずつ自分の言葉を紡ぎ出すようにしていた。決して焦ることなく、その瞬間に生まれてくる限りの言葉を書き留めておこうと思った。それがどれほど些細なことに思えたとしても、自分の内側で重要性を感じたものはできるだけ言葉にしていって。自己を深める揺らぎの中にいることは、一旦言葉を失い、そこからまた既存の自己を超えた新たな言葉を生み出していく。そのようなプロセスがそこにあり、そうしたプロセスを醸成してくれるのが旅の持つ一つの意義だと改めて思わされた。

顔を見上げると、書斎の窓の向こうには朝日で照らされた明るい世界が広がっていた。時刻は七時半を回り、早朝の優しい太陽の光がフローニンゲンの街に降り注いでいる。小鳥の美しいさえずりが途絶えることなく規則的に聞こえてくる。その規則的な流れに身を委ねてみる。規則的な流れの中にある不規則な揺らぎを確かに感じる。小鳥の鳴き声も揺らぎを持っているのだ。

その鳴き声を聞く私の中にも絶えず揺らぎが生じ、自分が耐えなまい揺らぎの中に生きていることを改めて強く実感する。今日も揺らぎの中を生きて行く。

日々の創造活動とは、毎日経験される揺らぎを表現することに他ならないのではないかと思えてくる。揺らぎの中に創造の種がある。そんなことを思わずにはいられない。フローニンゲン:2018/5/9 (水)07:30

### 2539. 歩くことの意義

たった今、研究ミーティングを終えて自宅に戻ってきた。今日は本当に良い天気だ。このセリフをここ何日かの間に何回も述べていたように思う。それほどまでにここ最近の天気は優れているということを意味しており、同時にこれまでの天気が厳しいものであったことを物語っている。

---

午前九時半に自宅を出発し、30分ほどの散歩を兼ねてザーニクキャンパスに向かった。行き道はいつもの通り、近くの運河沿いにあるサイクリングロードを歩いた。最後にザーニクキャンパスを訪れたのは一ヶ月ほど前であり、気づきかない間に一気に生命の息吹が芽生えたことを目の前の景色は物語っていた。青々と茂る草木に、道端に花を咲かせているタンポポなどがとても印象に残っている。

そして、運河の上で戯れているカモや、木の上で美しい鳴き声を奏でている鳥たちの姿がありありと蘇ってくる。自分の足で歩くこと。オランダは自転車が必要な交通手段の一つとなっているが、私はとにかく自分の足を使って歩きたいと思う。歩ける範囲であれば、自転車も他の交通機関も使わない。自らの足で一つ一つの景色と同化していくことは、内側に落ち着いた流れをもたらす。

現代人が内側の流れに気づかず、外側の流れに汚染されてしまっているのは、単純に自らの身体を超えた形で物事を進めていこうとするような行動を日々取っているからではないかと思う。確かに自動車や電車は便利だ。しかし、それらの手段を用いては見逃されてしまう景色があるばかりではなく、何よりも自らの身体感覚までもが喪失してしまう。とりわけ、自然と自己との調和が崩れてしまう。

そんな危機に直面した時代に私たちは生きている。過去の偉大な創造者の多くが散歩を好んでいた理由というものが徐々に見えてくる。彼らは内的感覚に忠実になり、自然との調和を大切にしていたのだ。自己の身体感覚を遥かに超えた人工的な時間の流れにできるだけ組み込まれないこと、そして自然のリズムと自己のリズムをできるだけ同調させること。そうしたことを行うことが、彼らの尽きることのない創造性につながっていたのではないかと思う。

そのようなことを考えながら、ザーニクキャンパスに向かっていると、程なくして目的地に着いた。まずは、いつもお世話になっている二人の博士とコーヒーを片手に世間話をした。今日のオランダは最高気温が27度に達するが、やはりこれは異常とのことであった。明日は15度ほどまで落ち込み、夕方からは雨が降る。

「昨日は本当に暑かった」と二人の博士が述べているように、昨日も暑かった。話を聞いてみると、オフィスにクーラーがないとのことであり、「それは日本では考えられない」と私が述べると、「しかし、

---

クーラーを使うような日は夏の間に15日あるかないかだ」とディエナム博士が述べた。確かに、この二年間を振り返ってみると、夏の間に暑さを感じたのは15日あるかないかだった。正直なところ、窓のカーテンを閉めれば、クーラーが必要だと思った日は一度もない。

そうした事実がフローニンゲンという街の気候を物語っている。今日のように仮に暑い日であっても、湿度は高くなく、木陰や吹き抜ける風は実に爽やかだ。そんなことを考えながら、今日のミーティングが始まり、実り多い形でミーティングを終えた。もし必要であればもう一度ミーティングの場を設けることになり、実質上ミーティングは今日で最後かもしれない。

来月の初旬にほぼ完成版の論文を二人に提出し、そこでまたコメントをもらう。コメント次第では再度ミーティングの場を設けるという流れになった。二人の博士にお礼を述べ、私は建物の外に出た。燦然と輝く太陽と爽やかな風がそこにあった。フローニンゲン:2018/5/9(水) 11:58

#### 2540. 二羽のカモより

時刻は夕方の四時半を迎えた。太陽を覆う雲が少しばかり現れ、今ちょうど太陽の光が遮られている。そのおかげもあってか、フローニンゲンの街に束の間の涼しさが戻ってきている。今日と明日の最高気温は10度以上も異なるため、そうした変動に対して自然な形で調節をしていきたいと思う。午前中に訪れたザーニクキャンパスからの帰り道、私は途中で一度足を止めた。

二羽のカモが運河沿いの道をよちよち歩いており、その様子を観察しようと思ったからである。カモに近寄ってみても、それほど警戒する様子はなく、二羽のカモは何か餌を探しているのか、しきりと地面をくちばしで突きながら移動している。特にめばしい餌など見えず、それでも小石などをついばむカモの行動を見て、実に不思議だと思った。確かにカモはこちらをそれほど警戒している様子はなかったが、私が立ったまましていると怯えることもあるのではないかと思われたため、その場でしゃがんで観察を進めた。

この河川敷はサイクリングロードであるから時折自転車に乗った人が通る。彼らは私が何をしているのかをさぞ気になっていたことであろう。この二羽のカモは種類が異なり、体の色が異なる。これまで二年間カモの様子を何気なく観察してみると、頭部が緑色のカモは気性が荒いことに気づく。

---

今朝も、頭が緑色のカモ同士が揉めあっており、昨年は緑色のカモが茶色のカモをいじめていたのを目撃し、緑色のカモを追い払った経験がある。今、二種類のカモの違いについて調べてみると、どうやらこのカモはどちらもマガモに分類されるらしく、繁殖期にオスは頭部が緑色になるらしい。そして、繁殖期以外ではオスもメスも茶色の姿になるそうだ。先ほど観察していた二羽のカモは、どうやら性別が異なるらしい。

しゃがんでカモの顔をまじまじと眺めてみると、このような生き物がいることに純粋に驚いた。なんと多様な生物がこの世界にいるのだろうか。自然界の多様さに加えて、私は人間界の多様さにも驚かずにはいられなかった。午前中にミーティングを行った二人の博士にせよ、サイクリングロードを自転車で走る人たちにせよ、なんと多様な人間でこの世界は溢れていることか。

このリアリティは本当に多様性で満ち溢れている。そのシンプルな事実改めて感激をした。

今朝方、以前作った自分の曲を聴いていると、通常の認識世界を超えた世界につながる光り輝く階段を知覚することが時折あることに気づいた。曲を聴きながら喚起されたその階段をすかさずにスケッチとして形にしておいた。

光り輝く階段を知覚する体験は、超越的な次元が絶えずこのリアリティに存在していることを示しているかのようである。肉眼をいくら凝らしてみたところで全く見えない次元がこのリアリティには存在しているようだ。

先ほど運河沿いのサイクリングロードで一歩立ち止まり、二羽のカモを眺めようと思った意思是、そうした超越的な認識世界からもたらされたものであり、カモを観察するという何気ない行為がそうした世界につながっていく道であるように思えた。

今日はまだ探究活動に充てる十分な時間がある。引き続き、読むこと、書くこと、作ることを継続していく形で一日を終えたい。フローニンゲン:2018/5/9(水) 16:39